名古屋女子大学　紀要　40（人・社）　253～264　1994

情報のなわばりと丁寧さ

服部幹雄

Territory of Information and Politeness

Mikio HATTORI

0. はじめに

本稿では，神尾(1990)によって提唱されている情報のなわばり理論の立場から丁寧さを考察する.[1] 情報のなわばり理論は，言語によって表される情報内容と話し手，聞き手とのかかわりに関する研究である．そこでは，話し手や聞き手との心理的距離に基づいて情報が扱われ，話し手や聞き手に関連を持つ情報と持たない情報が，それを表す文形(直接形および間接形)とどのように関わるかが論じられている.[2] この理論はまた丁寧さの研究と密接に関係するものである．話し手が自分に関わりを持たない情報と持つ情報は，丁寧さの見地から，それぞれ直接形で表現されれば非礼な印象を与える情報と与えない情報というようにとらえ直すこともできるからである.

神尾(1990)において論じられている丁寧さの問題は，情報を間接形で表現することで丁寧さを生み出すストラテジーが中心であるが，間接形が非礼さを生ずる現象，また直接形と丁寧さの関わりについては詳しく議論されていない．さらに，いかなる条件の下で，ある文形が丁寧さと関わるのかについても言及されていない．本稿では，できる限り実際の会話のデータに即して，情報のなわばり理論に基づく文形と丁寧さの関わりを明らかにしてゆきたい.

1. 情報のなわばり理論

ここでは神尾(1990)によって提唱されている情報のなわばり理論について概観する．神尾は，話し手または聞き手と文の表す情報との間に一次元的な心理的距離を仮定し，この距離は〈近〉，〈遠〉の２つの目盛りのよって測定されるものとする．これに基づいて，話し手または聞き手に近である情報の集合は，その話し手または聞き手の情報のなわばりであると定義される.[3] そして，ある情報が話し手のまたは聞き手のなわばりに属するか属さないかによって，言い換えれば，話し手または聞き手にとってその情報が近いか遠いかで直接形か間接形かの選択が決まってくるという．この決定は話し手の認知状態によって瞬時に行われるものであるとされている．情報は話し手のなわばりに属しているかいないかのどちらかであり，それぞれの場合について聞き手のなわばりに属する場合と属さない場合がある．これにより，(1)の表に示される4つのカテゴリーが設定される.

(1)

		話し手のなわ張り	
		内	外
聞き手のなわ張り	外	A 直接形	D 間接形
	内	B 直接形	C 間接形

まず，Aの場合から見てゆく．これは情報が話し手のなわばりに属し，聞き手のなわばりには属さない状況である．

(2)　I'm feeling hungry.

(2)は話し手が直接知覚することによってのみ得られる情報を表している．よって，この情報は話し手のなわばりに属するが，聞き手のなわばりには属さない．そこでAの事例となり，直接形で表現される．(2)のような一人称心理文は情報が話し手のなわばりのみに属するもっとも典型的な場合であると考えられる．

次にBに属する場合を考える．これは情報が話し手，聞き手双方のなわばりに属する場合である．

(3)　It's a lovely day.

(3)は上天気の日に路上で出会った知人に対しての発話として極めて自然である．話し手と聞き手は共に上天気を直接体験しているので，(3)に含まれる情報は話し手，聞き手双方のなわばりに属する．用いられる文形はAの場合と同じ直接形である．[4]

次にCに属する場合，すなわち情報が聞き手のなわばりのみに属する場合を考える．

(4)　You seem to be very interested.

(4)で表現されている情報は聞き手のみが直接体験によって知り得る情報である．したがって，この情報は聞き手のなわばりに属するが話し手のなわばりには属さない．よってCの場合となり，間接形が用いられる．

最後にDの場合を考える．これは情報が話し手のなわばりにも聞き手のなわばりにも属さない場合である．

(5)　X: I'm not sure what time it is.
　　Y: I guess it's about 3 : 00.

(5)に含まれている情報は，XもYも時計を持ち合わせていない状況では，話し手にも聞き手にも遠い情報である．よって，Dのなわばり関係が成立し，間接形が使われている．

2. 情報のなわばり理論の原則違反と丁寧さ

ここでは前節で概観した情報のなわばり理論に基づき，情報のなわばり関係に反する発話の観察を通して，文形と丁寧さの関わりを明らかにしてゆく．2-1では話し手のなわばり外にある情報をなわばり内に属するものとして表現した場合，2-2では話し手のなわばり内にある情報をなわばり外に属するものとして表現した場合について考察する．

2.1　話し手のなわばり外にある情報の場合

神尾も指摘しているように，典型的に丁寧さを欠く場合として，まず考えられるのは，話し手が自分のなわばりに属さない情報をあたかも自分のなわばりに属するものとして表現する場合である．(1)で見たように，話し手のなわばりに属さない情報は，その情報が聞き手のなわば

りに属しているかいないかによって2分される．最初に，話し手が聞き手のなわばりのみに属している情報をあたかも自分のなわばりに属しているかのように振る舞った場合について検討してみよう．この場合は，相手が独占している情報をあたかも自分のなわばりに属するものであるかのように表現するわけであるから，結果として生ずる非礼さは十分予想されるものである．

(6) You are feeling hungry.

(7) You were born on October 5, 1961.

(8) Prostitution is not a crime in your country.

(6)は聞き手が直接知覚によってのみ得られる情報を表しているので，この情報は通例聞き手のなわばりのみに属し，話し手のなわばりには属さない．(7)は聞き手の過去の個人的事実に関する情報を表しているので，この情報は聞き手のなわばりのみに属し，話し手のなわばりには属さない．(8)は法律の門外漢が他国の法律の専門家に対して発したものである．この発話に含まれる情報は，聞き手にとっては，自国のしかも自己の専門分野に関するものであるので，自分のなわばりに属する．一方，話し手にとってはこの情報が近である理由は特になく，自分のなわばりには属さない．つまり，(6)〜(8)に含まれる情報は聞き手が独占している情報であると言える．したがって，これらの情報は間接形で表現されるのが自然である．[5] ここで，直接形を用いて(6)〜(8)の文を発すれば ぶしつけで非礼な印象を与えるのは明白である．[6] (6)は話し手が聞き手のプライバシーを侵害しているような厚かましさを感じさせ，(7)は話し手が聞き手の行動を左右する権威があるかのような印象を与え，(8)は話し手が聞き手に議論を挑んでいるかのような態度を示唆する表現である．

(6)〜(8)は事実言明文であり，Brown and Levinson (1987) の言う本質的な外面威嚇行為 (face–threatening act 以下 FTA) には当たらない文脈も十分考えられる．そのような文脈では，“顔” (face) に対する潜在的脅威は生じず，それを軽減する行為も不要のはずである．[7] しかし，その場合でも，なお直接形は不適切で丁寧さを欠くものと感じられよう．これらの非礼さは(6)〜(8)の発話が本質的にFTAであることによるのではなく，相手のなわばりに属する情報を自分のなわばりに属するかのように表現した，すなわち相手のなわばりを侵したことに由来するものだと考えられる．

次に，話し手が自己のなわばり内にも聞き手のなわばり内にも属していない情報をあたかも自分のなわばりに属するかのように振る舞った場合を見てみよう．

(9) Professor Brown is sleepy.

(10) Winter in Manitoba is severe.

(9)で表されている情報は， Professor Brown と特に近い関係にある人は別として，通例自己のなわばり内に取り入れることができにくい情報である．したがって，話し手にも聞き手にも遠である情報と言える．これを直接形で表現した(9)は，話し手が Professor Brown のプライバシーを土足で侵しているかのような非礼さが感じられる．(10)に含まれる情報は，もし話し手も聞き手も気候の専門家でなく，両者とも Manitoba に行ったことがないという先行文脈があったとすると，両者とも自分のなわばりに取り入れることができない．この情報を直接形で表した(10)は不遜な印象を与え，丁寧さを欠くものとなっている．

これらの例から，話し手が自分のなわばり内にも聞き手のなわばり内にも属していない情報をあたかも自分のなわばりに属するかのように振る舞った場合も，通常非礼な発話が生じることがわかる．ただし，これらの場合，聞き手がそれぞれ Professor Brown の家族，Manitoba

の住人である場合と比較してみれば明らかなように，話し手が聞き手のなわばりのみに属する情報を自分のなわばりに属するかのように振る舞った時程の非礼さは感じられない．なわばりを侵されているのが聞き手という会話の当事者ではないためであろう．

以上，典型的に丁寧さを欠く表現が生じる場合として，話し手のなわばりに属さない情報をあたかも自分のなわばりに属するものとして表現する場合を見て来た．会話のコーパスの中にも，話し手が自分のなわばりに属さない情報を直接形で表現した例はわずかしか見い出されない．実際の会話においては，話し手が自分のなわばり外の情報を直接形で表現した発話は，(11)～(13)に見られるように通例陳述としてではなく，聞き手の確認を求める平叙疑問文として聞き手に解釈されていることは興味深い事実である．

(11) X: you don't know that one
　　Y: no no

(12) X: Eliot you're particularly fond of
　　Y: yes

(13) X: [mhm] but this is your first choice this college
　　Y: yes it is yes

（以上3例 Svartvic & Quirk, 1980）

これまでの観察から察せられるように，自分のなわばりに属さない情報は間接形で表現するという原則を守ることによって非礼な発話になることを避けることができるのであるが，丁寧さの現象の複雑さを示す例として，逆にこの原則を破ることによって丁寧さが生ずる場合が神尾によって挙げられている．

(14) I know how hard this is for you.

(15) I seem to know how hard this is for you.

（以上2例　神尾，1990）

夫を病で失った直後の悲嘆に暮れている妻に対して，担当だった医師が発する言葉として(15)は(14)に比べて明らかに丁寧さにおいて劣っていると説明されている．(14)のような直接形がなぜ丁寧さを生むのかについては触れられていないが，この現象は次のように説明できる．既に見た(6)～(8)の諸例は Leech (1983) の分類に従えば協調型のカテゴリーに属し，[8] 丁寧さに関しては本質的に中立的な発語内行為である．これらの発話が直接形でなされると非礼になるのは，聞き手のなわばりが侵された，Brown and Levinson の枠組で言えば“顔”が威嚇されたからである．ここで直接関わってくるのは彼らの言う“消極的な顔”(negative face) である．“消極的な顔”とは人間であればだれもが自分のなわばり，領分に対して主張できる基本的権利を指す．具体的には束縛されたり負担を押し付けられたりすることから自由であることなどが含まれる．(6)～(8)に感じられる非礼さは，この“消極的な顔”が尊重されなかったためであると言える．[9]

一方，(14)，(15)は弔慰という発語内行為を遂行するものであり，これはLeechの言う懇親型 (convivial) に属する．[10] これは本質的に丁寧な発語内行為である．ここで直接関わってくるのは人間の持つもう1つの顔である“積極的な顔”(positive face) である．これは自分の個性，自我像が好ましいものだと思われたいという欲求を指す．具体的には自分や自分の所有物，自分の考えなどを認めてほしい，賞賛してほしいという気持ちなどが含まれる．この“積極的な顔”を満足させる行為が積極的丁寧さであるが，[11] これは，主に，話し手と聞き手の間に共通する基盤(具体的には興味，目標，意見，感情など)があることを断言，強調したり，あるいはそれを前提とした表現を使ったりすることによって示される．また，聞き手と話し手が協調関

係にあることを積極的に示す方法も用いられる．⒁の直接形はまさにこの積極的丁寧さの目的に沿うものである．すなわち，ここでは，聞き手の気持ちを知っていることを話し手は前提とし，またそれを主張することで，両者が協調関係にあること，さらには同じ感情を共有する“仲間”であることが表現されているわけである．⒂では間接形の使用によって話し手の前提や断言が弱められる分，よそよそしさ，無関心さが感じられる表現になっている．⒁，⒂の両例は，相手のなわばりに属する情報をあたかも自分のなわばりに属するものとして表現することが，積極的丁寧さを達成する1つの有効な手段たり得ることを示している．

直接形が厚かましさ，権威，プライバシーの侵害などの印象を与える性格を持っていることは既に見たが，その反面，積極的丁寧さにも関与し，相手に対する関心，思いやりをも示し得るのはまことに興味深く思われる．直接形が積極的丁寧さを示すために用いられている例はBrown and Levinson (1987) にも幾つか見いだされる．

⒃ Look, I know you can't bear parties, but this one will be really good — do come!

⒄ X: Oh, this cut hurts awfully, Mum.
Y: Yes, dear, it hurts terribly, I know.

（以上 2 例 Brown and Levinson, 1987）

⒃では聞き手の気持ちに関する話し手の知識が断定されることで，両者が協調関係にあり，欲求，目標を共有する“仲間”であることが強調されているが，これは後続する依頼というFTA を軽減する機能を担っている．⒄では X のみが知覚し得る情報をあたかも Y も経験をしているかのように述べることで，Y の X に対する共感，同情の気持ちが感じられる表現となっている．

2-2　話し手のなわばり内にある情報の場合

情報のなわばり理論に従えば，話し手のなわばりに属する情報は直接形で表現される．この場合，原則的に非礼さは生じない．しかし，あえて間接形を用いることで，言い換えれば自分のなわばりに属する情報を自分のなわばりに属さない情報として表現することで，丁寧さを表現する場合が多いことが神尾によって指摘されている．

⒅ That's not correct.

⒆ You are too overjoyed.

⒇ I am a devout Catholic.

（以上 3 例 神尾，1990）

⒅は，たとえば，教師が学生の発言の謝りを訂正するような場合が考えられるであろう．「学生の発言は誤っている」という情報は話し手の専門領域に基づいており，この情報は話し手のなわばりに属しているので，話し手は非礼になることなく自然に⒅を用いることができる．しかし，同じ情報を間接形を用いてI don't think that's correct のように言ったとすると，⒅と比較して丁寧さが感じられる表現となる．つまり，なわばり関係に反する発言を行うことで丁寧さが表現されていることになる．⒅～⒇の発話が非礼になり得る理由を，神尾は，直接形で表現された情報は，それが自己のなわばりに属することを強調するのみならず，聞き手のなわばりには属さないことをも強調する結果になりやすいためだと説明している．⒅～⒇が対応する間接形の発話に比べて丁寧度が低くなっているのは確かであるが，この 3 つの発話には本質的な非礼さが感じられることに注意する必要がある．これらの文においては，それぞれ“訂正”，“非難”，“自慢”いう本質的に“顔”を脅かす発語内行為が遂行されているからである．そこ

で情報の独占という印象を避けることによって生ずる丁寧さを考察するには，本質的に丁寧な発語内行為および丁寧さに関しては中立的な発語内行為の場合も検討してみなければならない．さらに，神尾が主張するように，自分のなわばりに属する情報をあえて間接形で表現するストラテジーが情報の独占化という印象を避けるためのものであるとしたら，このストラテジーは話し手，聞き手双方のなわばりに情報が属する場合に限られ，話し手のなわばりのみに情報が属する場合には関与しないのではないかという予測が成り立つ．後者の場合，話し手はまさに情報を独占し得る状況にあるからである．以下，情報が話し手，聞き手双方のなわばりに属する場合，情報が話し手のなわばりのみに属する場合に分けて，間接形と丁寧さの関わりについて検討してゆく．

まず，情報が話し手，聞き手双方のなわばりに属している場合を考える．

(21) a. Your house is very close to the campus.

（神尾，1990）

b. Your house is very close to the campus, isn't it?

(22) a. The ban on rice imports should be lifted.

b. I think the ban on rice imports should be lifted.

(21)は話し手が聞き手の車に乗って，聞き手の勤める大学から初めて聞き手の家を訪れた場合の発話である．話し手は直接体験したことによって，聞き手は自分の家についての個人的事実であるということに基づいて，(21)の表す情報をそれぞれ自分のなわばり内に取り入れる．(22)は米問題の専門家同志の会話の中に現れた発言だとしよう．すると，(22)に含まれる情報は，話し手，聞き手双方の専門に関わる情報であり，両者のなわばりに属することになる．これらの状況において直接形が用いられるのはまったく自然である．しかし，間接形を用いた表現に比べると明らかに丁寧さを欠く印象を与える．(21)，(22)は本質的に非礼な発話ではないので，[12] この印象はまさしく情報の独占化に由来するものであろう．直接形使用によって話し手のなわばり内だけに情報がある印象を与え，それはあたかも話し手だけが評価，判断をする権威を持っていることを示唆しているからである．会話のコーパスにもこのような状況における丁寧さを生み出すための間接形使用は頻繁に見られる．

なお，(18)～(20)で見たような非難，自慢などの本質的に丁寧さを欠く発語内行為が直接形で表現されれば非常に非礼な発話になることは言うまでもない．発話自体が本質的に非礼である上に，情報の独占化に由来する非礼さが付け加わるからである．[13]

(21)，(22)のように情報が話し手，聞き手双方のなわばりに属する場合，情報の独占化という印象を避けるために，間接形使用が丁寧さを表現する有効なストラテジーとなるわけだが，間接形が必ずしも丁寧度の向上に貢献せず，直接形で表現されるのが自然な状況も存在する．それは聞き手から情報提供を受けた直後に話し手がその同じ情報を表現するような場合である．

(23) X: now could you tell us about it what what's he trying to do there (a)
Y: [∂m] (b)
X: what does he do for you there (c)
Y: no no I'm afraid I couldn't no I can't remember it well (d)
enough (e)
X: you can't remember it (f)
Z: now about The love song of Alfred prufrock what is that poem (g)
about do you think

(24) X: how did you get on with Chaucer (a)
Y: well I liked it (b)
X: you liked it do you remember any Chaucer now (c)
Y: [ə:] (d)

(以上2例 Svartvic & Quirk, 1980)

(25) Y: My son is a student at Harvard. (a)
X: Your son is a student at Harvard. What is his major? (b)

(23)の(f)，(24)の(c)に含まれている情報はそれぞれYの直接知覚，または直接体験によってのみ得られるものであるので，これらの情報はYのなわばりに属している.[14] また(25)(b)に含まれる情報は聞き手の近親者についての重要な事実であるので，この情報はYのなわばりに属するものである．一方，3例ともXはYからこれらの情報の提供を受けている．したがって，話し手にとって情報が近になる条件の1つである「話し手自身が伝聞によって得た確実とみなす情報」により，これらの情報はXのなわばりにも属している．すなわち，3例ともBの場合が成立していることになる．この場合，Xは通例非礼になることなく直接形を用いることができるが，丁寧さを表現するためにあえて間接形を使うストラテジーを使うこともできるはずである．これらの情報は聞き手のなわばりにも属しており，聞き手自身に関する，聞き手自身に関わりの深い情報であるので，情報の独占化が特に強調されやすい状況だと考えられるからである．ところが，これらの会話においては直接形がごく自然に使われており，丁寧さを欠く印象は感じられない．それどころか，(23)(f)，(24)(c)，(25)(b)を間接形で表現したとしたら不自然な発話になってしまう．

興味深いのは，(23)(f)，(24)(c)，(25)(b)の発言が行われた後話題が変わり，その後の会話でXが再びこれらの情報を発する場合には間接形も十分自然であり，間接形の方が直接形よりも丁寧さの増す発話になるという点である．たとえば，(25)の会話の後，話題が変わり，その後の会話であるいは後日XがYの息子についての話題を再び取り上げる場面を考えてみよう．Xの発言は You said your son was a student at Harvard. Could you give me his number? I want to ask him about Harvard. のように間接形が自然であろう.[15] このことは，話し手が情報を獲得した直後か否かが重要な関わりを持っていることを示している．つまり，話し手が情報を獲得した直後においては，情報が聞き手のなわばりにも話し手のなわばりにも属していることが明白であり，その結果直接形使用による情報の独占という印象が生じにくいのだと考えられよう．

本質的に丁寧な発語内行為の場合も間接形使用が丁寧さを生み出すストラテジーとして用いられないことが多い．典型的な場合としてお世辞(compliment)の事例を考えてみよう.[16]

(26) Your apartment's nice.

(Manes & Wolfson, 1981)

(27) You did a beautiful job of explaining that.

(28) You are a good rower, Honey.

(Pomerantz, 1978)

(26)は話し手が聞き手のアパートを初めて訪れた場合に自然な発話である．話し手は直接体験によって(26)の表す情報を得たので，また聞き手はこの情報が自分の所有物に関するものであるため，それぞれ(26)に含まれる情報を自分のなわばり内に取り入れる．すなわちBの場合が成立していると考えられる．(27)，(28)は聞き手がある行為を行った後で，また行っている時に発せられたものである．話し手は(27)，(28)に含まれる情報を直接知覚によって得ており，また聞き手はこ

の情報が自分の行為，または一性質に関するものであるので，この情報は話し手，聞き手双方のなわばりに属している．また，(27)，(28)では聞き手が話題になっており，これは話し手による情報の独占化という印象が強調されやすい状況であると言える．

ところが，会話のコーパスおよびお世辞，賞賛の発語内行為の研究者たちによって採取されたデータを観察してみると，なわばり関係に反してあえて間接形を使った例は非常に少ないことがわかる．たとえば，Manes and Wolfson (1981)，Holmes (1988) ではお世辞に用いられる統語形式の種類は極めて限られていることが明らかにされている．これらの研究は直接形，間接形に直接言及してはいないが，[17] 典型的なものとして挙げられた発話例に間接形のものは非常に少ない．また直感的にも，お世辞として発せられた I think you are pretty. が状況によっては大変非礼な発話になり得ることは容易に理解できよう．つまり，お世辞や賞賛の発語内行為を遂行する際には，なわばり関係に反する発話をあえてすることで丁寧さを表現するストラテジーがほとんど使われていないことになる．

この現象を説明するには，お世辞，賞賛の発語内行為が本質的に持っている性質を理解することが重要である．先にも述べた通り，お世辞は本質的には丁寧な行為である．その中心的な機能は，Holmes (1988) の言うように，会話の参加者間の仲間意識 (solidarity) を強化することにあると言える．換言すれば，人間関係を確立し，維持するための潤滑油としての機能である．また積極的丁寧さを示すことで潜在的に人間関係を疎遠なものにする恐れのある FTA を軽減する機能も重要である．[18] お世辞の持つこうした機能を考えてみると，直接形が多用されることは十分首肯することができるように思われる．直接形を使うことは，話し手がお世辞の対象 (ほとんどの場合が聞き手) に対して一家言あることを示唆するが，それは同時に聞き手への強い関心，興味をも意味するからである．直接形は情報の独占というマイナスな印象を与える性質を持っている反面，その情報において話題となっているものに対する強い関心，興味，愛着等を示すプラスの性質も合わせ持っている．そして，お世辞，賞賛のように本質的に丁寧な発語内行為においては，後者の性質がより深く関わるものと思われる．[19]

次に話し手のなわばりのみに情報が属する場合を検討する．この場合，話し手が情報を独占し得る状況にあるため，間接形の使用は丁寧度に関わる要因とはなりにくいことが予想される．

(29) X: well what what is a symptom then
Y: a symptom's something the the patient complains of the sign is something the doctor elicits

(Svartvic & Quirk, 1980)

(30) X: Well it looks to me as if we shall have to fit him in somewhere. What does Monday morning look like?
Y: Well Monday morning is extremely busy. You've got all the short-list interviews.

(29)は医師 (Y) と医学の分野では素人である人物 (X) との会話の一部である．X と Y は医学の話題について話し合っている．この状況で，Y が医学に関する情報のほとんどを直接形で表現しているのは極めて当然である．Y にとって医学に関する情報は自己の専門領域に関わるものであるので，自分のなわばりに属するが，X にとっては医学に関する情報が近である理由はなく，そのなわばりには属さないからである．(30)は秘書 (Y) と学校の校長 (X) との会話である．この状況でも，秘書が校長に向かって校長の予定を告げるのに直接形を用いるのは極めて自然である．校長の予定は秘書の職業的領域に関わる情報であるので，この情報は秘書のなわばりに属するが，校長はこの情報を知らなかったので，自己のなわばりにその情報を取り入れることが

できないからである．(29)，(30)において，それぞれ医師，秘書が自分のなわばり内にある情報を間接形で表現したとしたらどうだろうか．専門家，職業人としての立場を放棄したような不自然な発話になることは明白である．[20]

自分のなわばりのみに属する情報を間接形で表現した場合は，一般に丁寧さは生じず，不自然な発話を生むように思われる．さらに次の例を検討してみよう．

(31) *My name seems to be John.

(32) ??I think that I can play the piano.[21]

(以上2例吉川，1993)

(33) ??It looks like I'm having an affair with Mary.

(31)～(33)の文は一般に容認されないか容認度の低いものになる．[22] これらの発話が奇妙なものになるのは，これらの文に含まれている情報が話し手のなわばりのみに属するものであることが明白だからである．つまり，(31)～(33)の情報は，話し手がまさに独占している私的領域に関するものであり，通常の状況では話し手にとって遠であるという読みが与えられないためである．このことは次の例によって明らかになる．

(34) ??My wife's name seems to be Mary.

(35) ?I think that my wife can play the piano.

(以上2例吉川，1993)

(36) It looks like my wife is having an affair with Tom.

(31)～(33)よりもそれぞれ容認度が向上しているのは，妻は話し手が完全に独占している私的領域とは必ずしも言えないためである．換言すれば，話し手にとってこれらの情報が遠であるという読みが想起しやすくなっているということである．たとえば(34)の表す情報が話し手にとって遠である読みは非常に有標的なものになってしまうが，(31)よりは若干ながら想起しやすいように思われる．(35)では情報が話し手にとって遠である状況はより想起しやすく，(32)にくらべて容認度は高くなる．[23] (36)では情報が話し手にとって遠である状況はごく自然に想起できよう．

これらの観察結果からわかるように，話し手のなわばりのみに属する情報を間接形で表現すると通例容認度の低い文になる．(31)～(35)は容認される文脈も考えられるが，その場合でも話し手の特殊な精神状態，聞き手との特殊な人間関係を暗示するだけで，丁寧さの向上には関わらないようである．話し手のなわばりのみに属する情報における間接形の使用は，一般に丁寧さに関与しないように思われる．[24]

ところが，実際の会話においては，話し手のなわばりのみに属する情報における間接形の使用が丁寧さを生み出す場合が存在する．それは話し手によってその情報を表す発話が本質的にFTAであると感じられた時である．

(37) That was very good but I believe that took place in 1945.

(38) You may have the wrong date.

(以上2例 Takahashi and Beebe, 1993)

(39) X: You have a meeting tomorrow. (a)

Y: Tomorrow? Tomorrow is my day off, isn't it? (b)

X: I don't think it is. (c)

Takahashi and Beebe (1993) では，教授が学生の誤りを訂正する状況において，自分が教授ならどのような発話をするかを被験者に内省させている．[25] (37)，(38)は典型的とされている回答例であるが，ともに間接形が使われている．Takahashi and Beebe によると回答の71%に間接形

等の緩和表現が見られたという．(37)，(38)においてはそれぞれ「事件が起きたのは1945年である」，「学生の述べた年月日は誤っている」という情報は話し手の専門領域に基づいており，この情報は話し手のなわばりのみに属する情報である．したがって，話し手は訂正という状況でなく，講義の中でその事件の起きた年号を学生に一方的に教授する場合であったなら，間接形の使用は不自然で The incident took place in 1945. のように直接形で表現したはずである．しかし，訂正という状況では(37)，(38)は決して不自然でなく，直接形に比べて丁寧さが感じられる表現となっている．(39)は X(秘書)と Y(社長)との会話であり，秘書が翌日の予定を社長に告げている場面である．(39)(a)に含まれる「社長は明日会議がある」という情報は話し手の職業的領域に関わるものなので，この情報は話し手のなわばりに属する．一方，社長はこの情報をそれまで知らなかったので，この情報は聞き手のなわばりには属さない．よって，秘書が直接形を用いるのは極めて自然であり，ここで間接形を用いると不自然になる．だが，(39)(c)においては「明日は社長は休日ではない」という情報は話し手のなわばりのみに属する情報であるにもかかわらず間接形が用いられている．[26] (39)(c)の発話に不自然さは感じられず，しかも同じ情報を It isn't. と直接形で表現するより明らかに柔らかで丁寧な表現になっている．

(37)，(38)，(39)(c)においては，なぜ間接形が適切に丁寧さを表現するストラテジーとして使われているのだろうか．これは(37)，(38)が訂正，(39)(c)が不同意という本質的に丁寧さを欠く FTA であることに由来するものであるからと考えられる．すなわち，FTA に内在する本質的非礼さを軽減するために，丁寧さを表現する必要が生じ，間接形がその手段として自然に用いられる状況になっているのだと言えよう．

3. お わ り に

本稿では，情報のなわばり関係の原則違反が丁寧さとどのように関わるかを考察して来た．その結果，次のことが明らかになった．自分のなわばりに属さない情報を自分のなわばりに属するものとして直接形で表現した場合は，通例聞き手または第三者のプライバシーを侵しているかのような丁寧さを欠く発話が生ずる．ただし，積極的丁寧さが求められる状況では，情報のなわばり関係に反してあえて直接形を用いることで相手への関心，思いやり，興味を示すことができる．自分のなわばりに属する情報は通例直接形で表現されるが，その情報が聞き手のなわばりにも属している場合は，情報の独占化を示唆し，非礼さを生じやすい．そのため，あえて間接形で表現するストラテジーが使われる．自分のなわばりのみに属する情報は通例情報の独占という印象を生ずることなく直接形で表現される．この場合，一般に間接形は不自然になる．ただし，そのような情報を表す発話が相手の発言の訂正，不同意等の FTA である場合は間接形を用いることで丁寧さが表現される．

以上の考察結果から，発話の持つ文形は消極的な顔と積極的な顔(両者はしばしば相対立するが)の両者とからみあって，丁寧さを増したり，減じたりするのに貢献することが明らかになった．また，訂正に見られる間接形の使用から，文形の選択には発話の会話管理上の機能も大きく関与していることが示された．文形と丁寧さの関係は，発話を会話行動の一部として，広く会話の参加者の人間関係，会話のスタイル等の見地からさらに詳密に研究される必要があろう．これについては今後の研究課題としたい．

注

1．丁寧さとは何かについては諸説あるが，ここでは一般的な見解に従い，ストラテジーとして用い

られる人間関係の軋轢の回避としておく．詳しくはKasper(1990)を参照．

2．神尾(1990)によれば，直接形とは確定的な断言の形を取る文形，間接形とは断言を避けた不確定な文形を言う．英語の場合，間接形にはseem, appear, mayなど不確定性を意味する動詞または助動詞を含む表現，推測，伝聞などを表す主節表現，修辞的な疑問文等が含まれるとされている．

3．ある情報が話し手にとって近であるか遠であるかを決定する条件を網羅的に述べることは困難と思われるが，次に神尾が挙げている話し手にとって情報が近になる条件の幾つかを示す．これらは日本語，英語に共通するものであるが，eは英語のみに適用される条件として仮定されている．

ａ．話し手自身が直接体験によって得た情報

ｂ．話し手自身の過去の生活史や所有物についての個人的事実を表す情報

ｃ．話し手自身の近親者またはごく身近な人物についての重要な個人的事実を表す情報

ｄ．話し手自身の職業的あるいは専門領域に関わる情報

ｅ．話し手自身が伝聞によって得た確実とみなす情報

4．(3)は付加疑問文を使った間接形も可能であるが，直接形でも不自然さはまったくない．ただし，音調はAの場合とは微妙に異なる場合があると神尾は述べている．

5．どういう間接形が適切かは文脈により異なる．

6．(6)〜(8)の発話が確認を求める平叙疑問文として機能している場合は非礼な印象は生じない．神尾の言うように情報の正否を求めている場合の疑問文は直接形，間接形にも属さないからである．また，(6)〜(8)の発話が陳述として機能し，なお非礼にならない状況も存在する．これらの発話に含まれる情報が話し手のなわばりにも属している場合である．(6)，(7)ではそのような状況は考えにくいが，話し手から聞き手に対してなんらかのコントロールが働いている場合が考えられる．たとえば，話し手と聞き手が極めて近い人間関係にあって，話し手が聞き手に対してその行動をコントロールできる権威を持っているような場合である．たとえば，話し手が母で聞き手が小さい子供であるような状況では(6)〜(8)の情報は話し手のなわばりにも属することになり，非礼な発話とはならない．(6)のように通例一人称以外の主語では容認度が極めて低くなる心理文でも，この状況では容認可能なものとなることは注目に値する．

7．Brown and Levinson(1987)の枠組みにおいては，本質的に“顔”を脅かすとされるFTAが仮定され，FTAがもたらす“顔”に対する潜在的脅威を軽減する行為が丁寧さであると考えられている．

8．Leech(1983)は社会的目標との関わりにおいて分類した発語内行為の中で，断言，報告など社会的目標とは無関係の機能を持つものを協調型(collaborative)と名付けている．

9．ここでは扱わなかったが，本質的に非礼な発語内行為の場合は，それ自身の非礼さに，相手のなわばりを侵したことからくる非礼さが加わり，非常に非礼な発話となることは言うまでもない．

10．その目標が社会的目標と一致する発語内行為を指す．

11．Lakoff(1973)による丁寧さの規則ではMake A feel good — be friendlyがほぼ相当しよう．

12．反論などとして意図された場合はFTAとなる．

13．この場合は，間接形使用に加えて，Well maybe I shouldn't say that, I don't like to bragなどの発話が前後に現れて非礼さを軽減する措置が取られることが多い．

14．これらの発話が平叙疑問文でないことは，両例ともYの返答が後続せず，(23)ではZが(24)ではXが次の発言を始めていることからわかる．

15．英語では情報がいかにして，また，どこから得られたかを示す表現も間接形の一種であると神尾は述べている．

16．Brown and Levinsonはお世辞もFTAであるとの見解を取っているが，ここでは基本的に丁寧な発語内行為であると考える．この問題についてはHolmes(1988)を参照．

17．Manes and Wolfson(1981)には，お世辞は間接形でも表現されうるとの記述があるが，直接形との相違などについては論じられていない．

18．お世辞そのものがFTAとして働く場合には，お世辞を弱める形式が特にニュージーランドの男

性間で多用されることがHolmes(1988)に述べられている.

19. 同意などの発語内行為でも同じ現象が見られる. 詳しくはPomerantz(1984)を参照.
20. 話し手が卑屈なまでにへりくだっているような場合には自然となる場合もあるが, いずれにしても丁寧さは向上しない.
21. 例文は吉川(1993)のものであるが, 容認度の判断は彼のものとは異なる.
22. 記憶喪失者の発話であれば容認される.
23. たとえば㉟では新婚間もないような状況が考えられるであろう.
24. ただしBrown and Levinson(1987)には, 話し手が積極的丁寧さを表現するために, 自分のなわばりのみに属する情報を付加疑問を用いて表現する例が見られる.
25. 事実の誤り, すなわち歴史的事件の起きた年号を訂正するという状況を設定している.
26. 秘書がこの情報に確信がある場合にも間接形を使うことができる.

参　考　文　献

Brown, P. & S. Levinson. 1987. *Politeness.* Cambrige:Cambrige University Press.

Holmes, J. 1988. "Paying compliments : A sex-preferential positive politeness strategy," *Journal of Pragmatics* 12：445-465.

Ide, S. et al. (井出祥子他) 1986. 『日本人とアメリカ人の敬語行動』, 東京：南雲堂.

Kamio, A. (神尾昭雄) 1990. 『情報のなわ張り理論』東京：大修館.

Kasper, G. 1990. "Linguistic politeness : current research issues," *Journal of Pragmatics* 14：193-218.

Lakoff, R. 1973. "The logic of politeness;or minding your p's and q's," in *Papers from the ninth regional meeting of the Chicago Linguistic Society,* pp. 292-305. Chicago.

Leech, G. 1983. *Principles of Pragmatics.* London:Longman.

Manes, J. & N. Wolfson, 1981. "The compliment formula," in Coulmas, F. (ed) *Conversational Routine.* The Hague: Mouton, pp. 115-132.

Pomerantz, A. 1978. "Compliment responses: notes on the co-operation of multiple constraints," in Schenkein, J. (ed) *Studies in the Organisation of Conversational Interaction.* New York: Academic Press, pp. 79-112.

Pomerantz, A. 1984. "Agreeing and disagreeing with assessments:Some features of preferred / dispreferred turn shapes," in Atkinson, J. M. & J. Heritage. (eds) *Structures of Social Action.* Cambrige: Cambrige University Press, pp. 57-101.

Svartvik, J. & R. Quirk. 1980. *A Corpus of English Conversation.* Lund: CWK Greerup Lund.

Takahashi, T. & L. Beebe. 1993. "Cross-linguistic influence in the speech act of correction," in Kasper, G. & S. Blum-Kulka. (eds) *Interlanguage Pragmatics.* New York: Oxford University Press, pp. 138-157.

Yoshikawa, H. (吉川寛) 1993.「言語相対論」 第25回白馬夏季言語学会における口頭発表.